

## 障害があることと

### パラスポーツの関係

橋本和秀（東京都多摩障害者スポーツセンタースポーツ支援員・大学非常勤講師）

日本からはまさに地球の裏側、ブラジル、リオデジャネイロでのオリンピック・パラリンピックのスポーツの祭典、皆さんの記憶に新しいことと思います。2020年には我が国、東京で1964年以来の夏季最大のスポーツの祭典がやってきます。障害のある人々と運動・スポーツを通して関わっていく中でパラリンピックについて多くの人々へ関心を持ってもらうための啓蒙・啓発活動が盛んになっています。

障害のある人となない人を「障害者と健常者」の区別をして表現をしたり「障害者」を「障がい、障碍…」と表現をしたりしているのを目にし、耳にします。最近では「障がい者」の文字を多く目にします。法的な文書については「障害者」です。こうした矛盾はなぜ起きるのでしょうか。筆者自身、文学的な知見がある訳でも言葉についての論争でもありません。障害があるということを全ての人々が正しく理解し、その人なりを見るのが最も大切なのです。

ある外国人の選手は「障害のない人々は運動・スポーツはしなくてもいい、しかしながら障害のある私たちは運動・スポーツはしなければならない」と言っていました。このことは様々な環境の中で人が持ち得ている機能が使えなくなり何もしないでいると、身体全身の機能の衰えも加速的に進んでしまう。こうしたことを防ぐためには残された身体の機能を最大限に活かすことで機能が失われた分まで補っていく大切さを指摘しています。

障害者のスポーツの効果は、障害があることで何かを諦めてしまった気持ちや自信を、運動とりわけスポーツの場面（陸上競技、車椅子バスケット、ボッチャ、卓球、モノスキーなど）で実体験のある成功体験により取り戻し、またスポーツに携わる人々との触れ合いは、久しく忘れていた心の高揚、自信そして仲間との交流を通しての自分自身の新しい発見など、まさに一歩前へ進んでいこうとする新たな自分の再創出とも言えます。

リオデジャネイロ 2016 パラリンピック競技大会閉会式で義足のダン

サーは世界中の人々が注目する中、ありのままを表現し喝采を浴びていました。皆さんにはどう映りましたか。4年後には約5千人の障害のある選手が東京に集います。パラリンピックの名称が使われた64年東京大会から2020 Tokyoに向け、私たちは障害への理解をさらに進めていき、共に歩みましょう。それはごくごく当たり前のこと、同じ人として全ての人が幸せであること。そんな東京の街、すてきですね。